

---

# 作戦従事命令・12月18日事件編

571レノにいさん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

作戦従事命令・12月18日事件編

### 【Nコード】

N7045S

### 【作者名】

571レノいさん

### 【あらすじ】

こちらは「作戦従事命令」のもう少し先に組み込まれる予定の部分ということになります。いずれ追いついた時点で、通し番号に繰り込む予定です。

いわゆる『消失』事件についての分析を試みるのが、主たる着想であります。

本作は、従来は本編の末尾に置いておりましたが、繰り込みが当

分先になりそうなので、一時別保管とすることといたしました。

（本作はmixiに投稿したものの転載です。）

ことの起こりはと問えば、やはりそれは三年前のあの日、キヨン君が長門嬢のもとを訪ねたことに始まることになる。長門嬢がそのとき、三年後の自分と同期した際、『何か暖かい甘やかなもの』がいつしよにダウンロードされてきたことは前に述べた。想像力を働かすまでもなく、それが所謂恋愛感情であったことは明白である。長門嬢の悲劇はここに端を発する。長門嬢自身、このような感情を保持していることが何かの障害の原因になるかもしれないという予感はなくもなかった。従って、より合理的かつ冷徹な判断によるならば、そのような『非合理的情動』は即刻削除されるべきであった。少なくとも、三年前の当時は観測本務に予定されており、本来的にはバックアップではなく長門嬢と同格であった朝倉涼子嬢はそのように判断した。定期相互点検の際、朝倉嬢は長門嬢のデータ処理に感情野に起因するかすかなノイズがあることを認め、『早期に完全削除することが望ましいわね。』『断然そうすべきだわ。』『言うことを聞かないと大変なことになるわよ。』などと再三にわたって指摘し、忠告し、そして長門嬢からみた自身の印象を悪化させるに至った。長門嬢はそんなことは先刻承知であったのだから。長門嬢はその『不思議な情動』を削除したくなかったのだ。統合思念体の端末として取り込まれてこのかた、こんなに暖かな、幸福な気持ちになれたことはなかった。そればかりにとどまらず、長門嬢にとつて、いまだ人を恋することができることが、すでに、泣きだしたくなるまでに、嬉しいことであった。長門嬢にとって、それはまさしく、『人間の証明』であったのだから。インターフェースの暮らしの中では冷徹、冷然、冷静な、徹底して鋭い判断を下すことを常に要求される。そのせいで宇宙人長門有希としての判断力は常に冷たく研ぎ澄まされ、その反面、少女長門有希としての心は震え上がり、縮こまり、凝り固まり、窮屈な思いを常に味わっていたのだ。

しかし、人を恋することで、少女長門有希の寒さに震える孤独な心は解き放たれた。この暖かな情動を放棄するなど、もはや思いもよらなかつた。長門嬢は心の隅に点つた恋の炎を消し止めず、むしろ燃え上がるに任せたのだつた。長門嬢はその炎の暖かさのなかで、生きている喜びを味わうことができた。自分の生きている意味を、独自に再確認できたのだつた。統合思念体に与えられたお仕着せの存在意義ではなく。

長門嬢の心の構造について、ここで概括しておきたい。長門嬢はもともとは人間であり、そのもともとの人間の心の外側に、宇宙人として必要な心の上部構造が構築されている。従つて、長門嬢の行動は基本的には、精神的に極めて強靱で一切物事に動じない『宇宙人長門有希』の冷静な判断が先行する。反面、『少女長門有希』も折に触れて微かにその姿をあらわす。（特にキヨン君に対して！）かといつて長門嬢は二重人格ではなく、二重性格ですらない。激しいギャップをもつ性質が同一人に備わっている、という表現がもっとも近かるう。

恋を知つて、長門嬢は変わった。人を恋すること、そして、その恋に挫折すること。そう、長門嬢の恋は運命づけられた失恋であつた。涼宮ハルヒ嬢とキヨン君とはきわめて親和性の高いふたり、似合いのふたり、まさしく「お互いに運命的な」ふたりであつた。出会つたその日、すなわち初めて会話が成立したあるときから、このふたりは心を重ね合い、互いに不足したものを補綴しあい、日ごと月ごとに、表面上はどうあれ、本質的にはどんどん仲良くなつていった。ほんの数ヶ月で、このふたりは実質的には夫婦同然、「お互いなしでは人生が立ち行かない」段階にまで、精神的共生関係を発展させるに至つた。さて、状況がこうなつてくると、長門嬢の苦悶は誰にも容易に理解できよう。恋する男の子が自分以外の女の子とどんどん親密になつていくのを、長門嬢はただ手をこまねいて眺め

ているほかはないのである。妨害も自己アピールも許されず、日々に心との交流を深めてゆくふたりを、ただ見ていることしかできない。長門嬢の一途に純情な恋心は日々手酷い挫折の連続であり、それだけによりいっそう燃え上がった。その無表情な見かけの奥では、恐るべきジレンマが常に渦巻いていた。ついにはその無表情に綻びが表れるほどに。キヨン君は単純にその変化を喜んでいたが、『見ぬもの清し』の言葉通り、喜んでいられるようなものではなかったのである。それはきわめて危険な兆候であった。強大な情報改変能力を行使できる長門嬢にはなくてはならぬ、嚴重な自己統制機能の破綻を如実にあらわすものであったのだから。長門嬢の恋心は燃え上がり、燃え盛り、燃え広がり、すでに長門嬢自身、コントロール不可能になってしまっていた。キヨン君の視線が自分に向くだけで長門嬢は至福に舞い上がり、その笑顔が他の女の子に向けられるだけで、あつという間に奈落の底に落ちこむ。かつて冷たい心を温めてくれた恋心は今や業火と化し、その猛烈な熱で長門嬢を苛んだ。

11月も後半に入ると、長門嬢の精神状態はもはや抜き差しならぬ段階に入ってしまった。猛烈に燃え盛る心の火はもはや大火の様相を示し、「全市にわたって広範に延焼中、火勢きわめて強、消火困難。」とでも例えるほかない状況だった。長門嬢は自分なりに、なんとか火勢を抑えようと努力はしていた。長門嬢は自問自答する。少しでも自分自身に有利な状況を見つけ出し、もはやほとんど苦痛と化した、恐るべき恋の猛火を抑えるために。

問：あの二人の間に入り込むことは可能であるか。

答：不可能である。かの二人の間にはもはや隙間がない。彼らは心理的にお互いを共有、不可分に結びついている。

問：あの二人は仲がよいようには見えない。

答：見かけ上の反発のしあいに惑わされてはならない。かの二人はいかにも若く、そのプライドと羞恥心ゆえ、お互い反発しあう形態をあらわしているにすぎない。彼らの関係はいわば水に水を注ぐごとく、まったく自然で、本質的に違和感ないものである。

問：あの二人は所謂「深い関係」がない。

答：形式論に陥ることは避けねばならない。ここで「深い関係」のあるなしは大して意味のある議論とはいえない。前述されている通り、彼らの結びつきは非常に自然なものである。適当な時機、適切な機会に、彼らは「人間関係のあらたな段階」に至るであろう。不可避的な流れのなかで、ごく自然に。

問：「深い関係」を、涼宮ハルヒに先行して「私」が「彼」と締結することにより、彼らの仲に入り込むことは可能であるか。

答：不可能である。これも前述の通り、彼らの結びつきは既に非常に強固なものであり、「私」との「関係」があらうとも、それは「一般的事故」として処理されてしまう可能性が非常に大きい。彼らはお互いの過失を赦しあうことを学び、益々関係を深化させるであろう。

問：「私」と「彼」が「結ばれる」可能性はあるか。

答：激しく既出。

そういつた経過で、長門嬢の対策は結局手酷い裏目に出てしまった。「少女長門有希」の淡い願望は「宇宙人長門有希」に木っ端微塵に粉碎されてしまい、「心の大火」はますます激しく燃え盛るのであった。悲恋こそは、恋愛の最高の燃料であるのだから。しかしなお長門嬢は努力した。『未来を垣間見る』という、禁じ手に打って出たのである。・・・しかし、それとても散々な失敗に終わった。「あの二人」はどんな形の未来であれ、仲睦まじく、それなりに幸

福そうに暮らしていた。「彼」の近くに、長門嬢の居場所はなかった。「彼」と長門嬢の距離は、いま現在と大して変化がなかった。「彼」と長門嬢が「結ばれる」未来など、あるわけもなかった。長門嬢は深くふかく傷つき、ひとり、悲嘆にくれた。長門嬢は誰に相談することもできず、独り、これまで悩み続けてきたのだ。心の大火にただ一人、立ち向かってきたのだ。しかし、長門嬢はもはや限界に近づいていた。さしもの強大を誇る宇宙人長門嬢の心もこのところひどく惑乱ぎみで、原因不明のエラーが多発、はつきりと不調であった。長門嬢はさすがに不安を感じ、緊急自己点検を実施し、そして愕然とした。長門嬢の心は、もはや焼け落ちる寸前だったのだ。長門嬢は自己評価を訂正しなければならなかった。「消火困難」から「消火不可能」に。長門嬢は無意識に自己を過信していた。長門嬢は自己の心の強大さにいつの間にか依存していた。多少のことではこの心は揺るぎもしない。そう、多少のことでは。しかし、ことは多少のことではなく、大いに大したことであったのだ。この「心の大火事」の火元は「少女長門有希」、すなわち長門嬢の心の屋台骨にあたる部分であった。屋台骨が焼け落ちてしまえば、すなわち全体が崩壊してしまう。強大な心の構造体が壊滅する際、どんな恐ろしい連鎖反応が発生するかわかったものではない。時ここに至って、ついに長門嬢は問題を独りで抱え込んでいることをやめたのだった。自分が崩壊する際には、かなり高い確率で、愛する「彼」に大変なとぼつちりを及ぼしてしまうことだろう。そんなことは許されない。愛する「彼」には、むしろ何も知らないでいてほしい、自分のせいで心乱すことなど……。長門嬢は決心した。長門嬢は自分自身を、統合思念体中央意志に対し、問題提起したのである。

12月18日事件は統合思念体にとつても不意打ちであったと一般的には考えられているようだが、その可能性はきわめて薄いと言わねばならない。あの一件は『長門嬢の自発的な自己補正行動』の一環をなすものであり、従って統合思念体中央意志との討議と立案

された計画に沿って執行された、言わば作戦であった。（ただし、主流派と穏健派を中心とする統合思念体の一部のみで意思決定し実施に移したため後刻問題になり、その結果『長門有希撤収』論が一時ほとんど可決されかねないところにまで到ったことは前述した。・

- ・ 主導的な派閥を名指しにすることは避け、長門嬢自身を問題にする形で。）

長門嬢は決定的な崩壊を目前にして、自ら、もはや自己の統御が不可能となったことを認め、言うなれば進退伺いを提出に及んだのであった。のちに長門嬢は『私の処分が検討されている』と述べてキヨン君を激怒させたが、このようにみえてくるとそれはむしろ当然の流れであったと理解できよう。長門嬢は自ら、自分が『欠陥インターフェース』であると立証してしまったようなものなのだから。完全性を至上命題として追求する統合思念体にとっては看過しがたいことであった。しかしここで穏健派が意見具申し、長門嬢は処分を免れたわけだった。まったくこれは首の皮一枚で繋がった命といっても過言ではない。長門嬢はとうに覚悟していた。任務解除、用途廃止、分解処分の運命を受け入れる心の準備はすでにできていたのだ。それでも長門嬢は自らの『立て直し』のための、計画を立案し提出した。意外にもこれはほぼそのまま承認され、執行所定期日を冠し、『準作戦（臨時調整工程）：事例1218』として実施の運びとなった。概要は以下の通りである。まず、「心の火災」が延焼して焼け落ちかけている「増築構造体」部分を「爆破」、このいわば「破壊消防」的な措置によって「心の火災」を大部分鎮火せしめ、後刻改めて「増築構造体」部分を再建する。なお、「破壊消防措置」執行の際、安全確保のため、部分的に世界改造を實行しなければならぬ・・・この起案はまず主流派が検討し、ついで穏健派が検査、主流派に再度差し戻され、主流派が最終的に承認した。このとき、『安全確保処置チェックリスト』、すなわち一時的な世界改造の青写真も同時に査閲された。・・・『朝倉涼子』の項目がまるごと抜け落ちているリストである。『朝倉涼子』こそは最大の危険性に他ならない筈だが、長門嬢は『朝倉涼子』のこと

などすっかり忘れ果ててしまっていた。長門嬢にとり朝倉嬢の存在はもともとあまり有り難くない類のものであった。『例の一件』でもともとあったあるかなきかの反感は決定的になり、朝倉嬢への強制的情報連結解除処置以降、長門嬢はむしろ清々したような気分であった。朝倉嬢の記憶は日々急速に薄くなり、起案が提出された頃にはすでに、「そついえばいた・・・そんな人が。」ぐらいの感想を、指摘されて初めて抱くような、希薄な存在感になってしまっていた。それに長門嬢はこの頃には、自分自身のことだけで手一杯となっており、従って朝倉嬢のことなどはもうまったく忘却のかなたにあったのだ。

ここで生じる疑問は、なぜ統合思念体は査閲の際その危険性を指摘しなかったのか、ということである。まず主流派については、項目に挙げられていないものは長門嬢自身が「危険性が些少」と判断した、という解釈であった。確かに、朝倉涼子という「人間」の人物像は、一般的な性質にとどまる限りは、危険性を感じさせるものではない。従って主流派はその点は指摘するにはあたらぬ事項に該当と判断、チェックリストをそのまま承認した。穏健派はいささか事情が異なっていた。彼らはこの件全体について、彼ら自身の目的があつたのだ。彼らの目的、それは「長門嬢と朝倉嬢の決定的な離間をはかる」ということであつた。穏健派はすでにこの時点で、『涼宮ハルヒの観測活動ならびに分析は容易ならざるものであり、長期の活動期間を必要とする』という判断のもと、「長期行動計画」を策定、そのなかには長門嬢と朝倉嬢の役割がすでに明確に規定されており、なおかつこの両者の役割は決してなれ合うことができない、両極端ともいふべき対立関係にあるものだった。穏健派は朝倉涼子の危険性を明白に認識していた。朝倉涼子が人間性の根底的な部分で完全に性格破綻しており、およそ良心というものに無縁な、いわば『からつぼの優等生』であることを見抜いていたのだ。彼らはチェックリストの不完全さ、朝倉涼子への対策の手抜かりに気づ

いていながら、見てみぬふりをした。そういうわけで、あの決定的なハプニングが発生してしまったのだ。朝倉涼子はキヨン君に対する、『殺人未遂の既遂犯』にうかうかとなりおおせてしまったのである。

朝倉嬢は長門嬢の頬に優しく触れた。その手は柔らかく温かかったが、長門嬢にとってはこの上なくおぞましく忌まわしい感触だった。恋する男の子を刺した手だ！ わたしの大好きな男の子を、この手が！ この手が！ この手が！ 長門嬢がもう少しはつきり意思表示できる人物なら、次のごとく喚いたであろうことは疑う余地がない。即ち・・・「触らないで！ 穢らわしい！」

さて、ここで読者は考えてみなければならぬ。あなたは、自分のいちばん大事な人に手を下そうとした、あるいは実際に下した人間を容認できるだろうか？ あなたの恋人、妻、子ども、両親、兄弟、親しい友人、誰でもよい。それらの人々の誰であれ、実際に殺害にいたらずとも、瀕死の重傷を負わせ、あるいはそうしようとしただけでも、決して許せないのではないだろうか。しかもそやつは悪びれもせずへらへらと、「あの場合ああするしかなかったのさ。」などと嘯いている始末である。さあ、この状況をあなたは受け入れられるか・・・大部分の人間にはそれはとうてい無理な相談であろう。あなたはせめて一発ぶん殴るためにとびかかるか、あなたの手に刃物があれば、躊躇なく相手を刺しにかかるかもしれない。それらのことがなにもできないにしても、あなたの心には憎しみが生まれ、その相手を不倶戴天の敵として、ゆるぎない嫌悪感を伴って、それこそ炎のごとく燃え上がるに違いない。

要するに、そういうことであった。その同じことが長門嬢にも起こったのである。朝倉涼子は過ちを犯していた。それは誤解に基づいていた。朝倉嬢は長門嬢の「二重基準」を理解していなかった。

長門嬢の基準には「宇宙人基準」と「人間基準」とがあり、長門嬢自身、無意識的にそれらを使い分けていたのである。そのうちの「宇宙人基準」は極めて広大な、それこそ思念体的な、宇宙的観念に立脚したもので、こうなると「許す」「許さない」の区別すら無意味なものとなってしまう。極端な話、自分自身に加えられたいかなる無礼乱暴狼藉であろうとも、無際限に許容することができるのだ。（『宇宙人長門有希』に対して実質的な被害を及ぼすことは、そもそも生身の人間には絶対不可能だがこの際そのことは措く。）切り刻まれようが引きちぎられようが直ちに原状回復が可能な、つまり物理的に損壊することが事実上不可能な『宇宙人』ならではの見解といえよう。これに対して『人間基準』はまったく何の変哲もない、『一女子高生長門有希』の判断基準である。（『女子高生長門有希』という人物はいささか風変わりではあるが、それは単なる人間の多様性の誤差の範囲内に完全に収まるものだ。）長門嬢はこのうち、『宇宙人基準』を朝倉嬢に、『人間基準』をキヨン君に、それぞれ適用していた。朝倉嬢はそのところを誤解し、「長門嬢の判断基準は常に『宇宙人基準』なのだ」と判断したのだった。『宇宙人基準』に基づく限り、人間の生死などは自然界における一般的な現象の単なる表れであり、原因がなんであれ、それ以上の意味は有さない。従って朝倉嬢は、長門嬢の意向については考慮せず、所属する急進派からの指令をそのまま実行に移した。この工作は是非とも現在必要なもので、いずれは長門嬢にも自分の行動の正当性が理解されるであろう、との予測に、というよりは希望的観測に基づくものであった。だが現実はそうではなかった。キヨン君に適用されていたのは『人間基準』であり、普通の人間さながら、長門嬢は完全に怒り狂う結果となった。しかもそれはそもそも自分自身の過失から発生してしまったことなのだ。怒りは自分自身にも向き、そして鋒先を変えて、結局は朝倉嬢にすべて叩きつけられる結果になった。長門嬢は朝倉嬢を『未来永劫永遠に許されざる不倶戴天の完全敵対分子』と規定、朝倉嬢に対する憎しみの感情を永久に掻き立て続け

る決心を固めた。自分自身の不甲斐なさを責める感情もない交ぜに。即ち、彼を傷つけてしまったのは私の過失（チェックリストの見落とし）によるものであり、従って実質上私が手を下したも同じ。彼がどう思っているようが、私は自らを懲罰せねばならない。長門嬢は燃え盛る憎しみの感情を、自らの中に保持した。それは熱くて重く、鋭く苦痛な、灼ける剣のごときものだった。憎しみが薄らぎそうになると、長門嬢は自らの心の火を掻き立て、まさに剣を鍛えるように、朝倉嬢への憎しみをことさらに、ひたむきに保ち続けた。古い革命歌にあるがごとく。

にくしみの坩堝に  
あかく灼くる  
くろがねの剣を  
うち鍛えよ

ある意味、朝倉嬢は生贄ともいえた。長門嬢は自分自身に向かったあまりに激しい、遣り場のない、怒りと憎しみをまとめて朝倉嬢に叩きつけることで、自分自身を保ったようなものだったのだから。長門嬢の宇宙的な心の中で人間的感情は増幅され、巨大な奔流、炎の大河となつてさかまいた。長門嬢自身が受け止めるには困難なほどのものだ。もとからあつた個人的反感、彼を刺したことへの猛烈な抗議の感情がガイドウェイの役割を果たした。朝倉嬢は免責されない。犯罪は確かに実行されたのだから。しかし、のちに朝倉嬢は長門嬢から、意外なほど強烈な憎悪と拒絶をうけることになるのだが、そこにはこのような事情があつたのである。

長門嬢にしてはこの反応は激しすぎるのではないかと思う人もあるかもしれない。しかし、ある事実から考え起こしていただきたい。

長門嬢は一途に恋する少女である。しかして、一途さというものは即ち激しさを意味するものだ。長門有希という少女は、そのクールな、あるいはか弱い外見の奥に、意外なほどの情熱を隠し持っているものである。一途な恋というものは、必ず激しい情熱に支えられているものなのだから。そしてその情熱が反転して憎しみに向かうときもまた、一途に、ひたむきに、そして情熱的に。それが長門有希という少女であった。長門嬢はインターフェースでありながら、極めて人間くさい性格を、しだいにはつきりさせはじめていた。そして、ここにこそ、穏健派の謀略の原因が、そして長門嬢の悲劇のよつてきたるところが求められるのである。

長門嬢は最初のうち、他のインターフェースたちとなんら変わるどころがなかった。即ち、きわめて目立たない存在だった。いるのかいないのかもわからず、そもそもそんな人間が存在しているのかどうかもはつきりしないような。しかし、そのうちに長門嬢は目立った存在になり始める。それも単なるクラスの人気者としてではなく、一種のカリスマ的な存在感を明らかにし始めるのだ。長門嬢のこの変化は、長門嬢独特のある事情と密接に関連して発現している。ひとを恋すること、そして恋に挫折すること、がそれである。この感情の大きな落差は長門嬢に微かな表情を出現させる程度の、ある種の柔軟性をもたらし、長門嬢はクラスにおいて、独特の存在感を発揮するに至った。穏健派は早くからこの現象に注目しており、長門嬢の浮き沈み揺れ動く危なっかしい感情の動きに気づいていながら、敢えてこれを放置、興味深く状況を観察していた。彼らのインターフェース喜緑絵美里がこの秘密観測活動の直接的な側面を担当、喜緑嬢一流の的確な分析を行った。統合思念体には理解しにくい人間の心理の面からのアプローチによるこの分析は、以後の穏健派のさらには主流派ならびに思念体中央意識の意向、さらには長門嬢の運命までも決定してしまうことになった。喜緑嬢は以降、穏健派の同意のもと思念体中央意識と直結、思念体自体の意向決定に深く関

わるようになっていく。12月18日事件の頃には、すでにその地位は確定的であり、長門嬢との討議の際、事態収拾のために幾つかの提案を行った。(名目上は提案だが、実際は命令といってよいものだったらしい。)

長門嬢は世界改変にあたって、いくつものトラップを仕掛けていた。涼宮ハルヒの不在、わかりにくいメッセージ、世界復帰への制限を設定したこと、そして、自分自身、等々。そう、長門嬢自身こそは改変後の世界における最大のトラップだった。長門嬢の意向は明白だった。『涼宮ハルヒのいない世界で、私は彼にとり、何者かでありうるだろうか?』これは自己修復工程にかこつけた、長門嬢の自己実現の戦いでもあったのだ。長門嬢は彼のこと大好きだった。しかし、長門嬢の恋路は、「涼宮ハルヒ」という名の超えられない壁に塞がれていた。この壁に対しては、さすがの長門嬢も無力であった。涼宮ハルヒはライバルとしては絶大に過ぎた。なぜなら涼宮ハルヒも彼を愛しており、とりわけ問題の彼はといえば、涼宮ハルヒを愛していた。しかもぞっこん惚れ抜いている有り様だった。物事に基本的に無関心な彼が、率先して涼宮ハルヒに、自分から声をかけていることからみても、このことは疑いない。彼はほとんど一目惚れに近いばかりに、涼宮ハルヒに「いかれて」しまっていたのだ。とっかかりがそうであるだけに、長門嬢の恋路は初っ端からつまづきの連続であり、最初から勝ち目のない勝負だった。長門嬢は悩んだ。世界改変にあたって彼に手を加えるべきか? そんなことはできるはずもなかった。二重の意味でそれは不可能なことだった。まず、彼を改変してしまうと、世界復帰のためにとっかかりが失われてしまう。また、彼を改変して最初から自分の恋人だったことにしてしまっても、それはあまりに無意味な、哀しい勝利といえた。出来レースに勝っても虚しいだけだし、あまりにもそれはアンフェアに過ぎる。それにしても長門嬢は本意だった。喜緑嬢と協議のうえ策定された世界復帰の要件は、彼と涼宮ハルヒを引き合わ

せることにその要諦があつた。彼らはすでに心理的に一体化しており、即ち涼宮ハルヒの喪失は彼に巨大な空虚感を抱かせることになろう。彼はこの空虚感を埋め合わせるため、涼宮ハルヒを探し、発見しだい、どうあつても、接触を試みずにはおれないであろう。涼宮ハルヒは彼のことを知らないことになつてはいるが、彼の接触を受けしだい速やかに心を開き、その直感と行動力をもって、他の補足的な要件を直ちに充足せしめるであろう。長門嬢は彼が涼宮ハルヒを追い求める気持が復帰工程の中核をなしている点が気に入らなかつたが、反論はできかねた。長門嬢にはある望みがあつた。野望といつてもいいかもしれない。それは、彼の空虚感を自分で埋め合わせたい、という望みであつた。

改変後の長門嬢は復帰後の長門嬢と記憶を共有しているかしていいないか？ この問には「当然している」と答えねばならない。「一介の女子高生」として彼と過ごした3日間の記憶は、長門嬢にとつては、不成功には終わったものの、宝物のように大事な思い出だつた。それはなんと甘美な記憶だつたらう！ ライバルもおらず、任務もなく、ただ純粹に彼を想い、彼とともにいた時間がどんなに幸福だつたことか。大好きな男の子と2人っきりの時間がどんなに心ときめくひとときだつたことか。返す返すも、朝倉涼子を見落としていたことは手痛い失敗だつた。殺人未遂事件も当然そうだが、ほとんど蛮勇に近い勇気を奮つて彼を家に招待したのに、それすらもぶち壊しにされてしまったのだから。

長門嬢の自己実現の総力戦は、結局のところ総敗北に終わった。彼はトラップにひとつも引かからなかつた。トラップがひとつひとつ撃破されるたびに、長門嬢は、涼宮ハルヒと彼の間には決して誰も入り込めないのだ、という突き刺さるような真実を、ひとつひとつ、確認させられるのだった。（そのときには長門嬢は改変中で認識能力は休止状態だったが、のちに復帰してから検討したときに、

結局そういう結論を避けられなかった。(涼宮ハルヒの不在も、わかりにくいメッセージも、復帰期限も、「彼」をいたずらに焦らせただけで、本質的にはなんらの効果もなかった。長門嬢自身すらも有効ではなかった。長門嬢は彼の前に、自分自身の根本をさらけ出した。人間だったころの自分ほぼそのままの、寡黙で、内気で、弱い、まさに「守ってあげたくなる女の子」。しかも、キョン君が大好きで、見つめられでもしたら恥ずかしさに俯いてしまうような仕草の可愛らしい、純情可憐な美少女。しかし、キョン君を動かすにはいたらなかった。キョン君はもうずっと前から、涼宮ハルヒを愛し、そして涼宮ハルヒに愛され、とうに相思相愛の、「お互いなくして人生なし」ともいふべき関係になってしまっていた。前述の通り、「精神的な共生関係」である。彼はすでに完全に涼宮ハルヒのものだった。従って、無意識的ながら、彼は涼宮ハルヒ以外の女性のアピールを、もはや一切考慮しなかったのである。長門嬢は当然このことをあらかじめ悟ってはいた。それでいて諦めはつかず、ちよつとでも自分になびいてはくれまいか、そんな思いもあったのだ。だが、長門嬢のアプローチはすっかりスルーされてしまった。そして涼宮ハルヒの所在が明らかになるに及んで、長門嬢の恋する乙女としての戦闘は、その敗北が確定した。要塞が陥落してしまつたのだ。戦線は突破され、正面の維持は不可能になり、全軍総崩れ、あつという間に本丸に攻め込まれて、長門嬢の、我が身を盾とした恋の冒険は終わりとなった。戦争は全正面で終わったのだ。全面的敗北をもつて。

それにしても、キョン君が涼宮ハルヒを想う気持ちは意外なほど強いものだったことは特に強調しておかねばならないだろう。彼は谷口君から涼宮ハルヒの所在を聞きつけるや否や、直ちに走り始めるのだ。しかも、この時の重要な懸案であるはずの『鍵』のことなどはすっかり忘れ果て、ただ、「涼宮ハルヒに会いたい」の一念で全力疾走しているのである。彼もまた、心に激しい情熱を秘めた、

一途な男であったのだ。長門嬢の悲哀は、その一途な情熱がすでにほかの女性にとられてしまっていて、決して自分には向いてくれない、ということであった。「一人暮らしの部屋に誘う」などという『女の飛び道具』じみた手まで繰り出しても、長門嬢は彼に、「女性としての影響力」を発揮することはできなかったのだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7045s/>

---

作戦従事命令・12月18日事件編

2011年6月29日19時32分発行